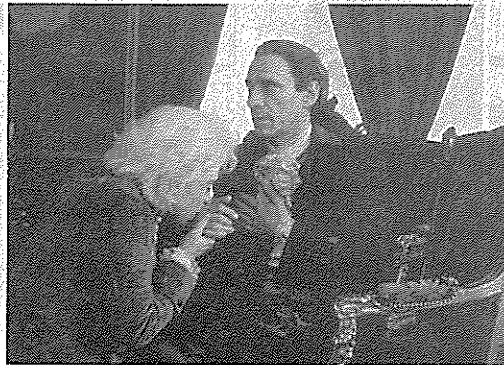


文化・文芸

bunka@asahi.com

日曜～金曜掲載

「アマデウス」3人の遊び心の結晶



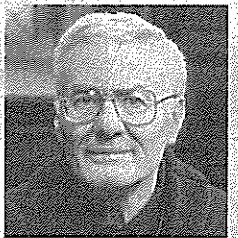
記憶に残る映画は少なくないが、記憶の中で育ち続ける映画はそう多くない。「アマデウス」(1984年)はそんな映画のひとつだった。

今月半ばに86歳で亡くなった「アマデウス」の監督、ミロス・フォアマンのネット上の訃報記事に、多彩なコメントが寄せられ続けている。「大人になり、ようやくサリエリが葛藤が理解できるようになった」「サリエリが好きだったあのお菓子が食べたい」「など、ディテールも鮮やかだ。語りたくなるシーンも、人によって全く異なるらしい。

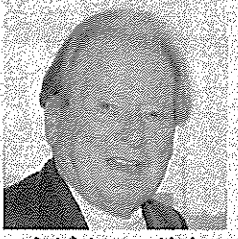
なぜか。作品のおおもとになったピーター・シェーファアの戯曲は、天衣無縫の天才(モーツァルト)と出会ってしまった秀才(サリエリ)、つまり「個人」の葛藤を克明に暴き出すものだった。それゆえ、誰の胸にもサリエリの悲哀が等しく印象づけられ



ミロス・フォアマン © Abaca/amanaimages



ピーター・シェーファー © Mary Evans/amanaimages



ネビル・マリナー = 2015年11月、東京都内

映画監督ミロス・フォアマンを悼む

た。しかし映画では、特定の人物に共感を集めてゆく手法をとらず、揺れ動く2人の「関係」にもつばら焦点を当て続けた。だからこそ、観客は作品に自身の人生や思いを自由に重ね、自分だけの感動をはぐくむことができた。

2015年11月、選曲と演奏を担当した世界的指揮者のネビル・マリナーに、インタビュの合間に「アマデウス」制作の経緯を尋ねたら、いたずらっ子のような声色で昔語りを始めた。

「この仕事が決まって最初にやったことが、ミロスとピーターを僕の田舎の自宅に招くことだった。飽きるほど徹底的に遊んだよ。テニスをしたながら、酒を飲みながらあの曲いね、この曲使えないかな、って。みんな、モーツァルトと人生が大好きだった」

「ミロスもピーターも僕に、つまり音楽に、すべて従うと誓ってくれた。この映画では、ストーリーより音楽が優先するのだと」

つばから生まれたものだった。多様なイメージを喚起する音楽の力にすべてを預けたフォアマンの映像、シェーファーの言葉、そしてマリナーの演奏。この3人の芸術家のピュアな遊び心が起こした化学反応の産物こそが、「アマデウス」だったのだ。

音楽学者の岡田暁生さんは「『アマデウス』を境に、クラシックのアイコンはベートーベン(父権の象徴)からモーツァルト(永遠の子供)になった」と指摘する。映画のモーツァルトのあのけたたましい笑い声が、歴史的なパラダイム転換を引き起こし、高みに鎮座する芸術が今の時代を生きる私たちの手の中にずんと落ちてきたのだと。

先のインタビュの7カ月後、シェーファー死去。同じ年の10月にはマリナーも。そして今月、フォアマンが逝った。マリナーが名付けた「3人の『少年』の宝探し」は、永遠に終わりを告げた。

モーツァルトをキンキン声で罵倒する義母の口が、オペラ「魔笛」で超絶技巧をきかせる夜の女王の口にオーバードラップしてゆくなどのアイデアは、さうした「遊び」の

しかし「アマデウス」はこれからも、権威に頼らず、己の視点で芸術について語る自由の尊さを思い起こさせてくれるだろう。作家個人の思いを超えた普遍性と、それがはぐくむ多様性。これこそが、芸術作品が「古典」として永遠のいのちを携えるための、必要不可欠な条件なのだ。

映画「アマデウス」から、サリエリ(右)とモーツァルト © Mary Evans/amanaimages

(吉田純子)